

平城宮東院地区出土の建築部材

—第301次

1 はじめに

本稿では、第301次調査出土の建築部材について報告する。本調査区は東院南門の南方に位置し、規模は東西56m、南北11～15m、面積約650㎡で、約130点におよぶ多くの部材が出土した。これらのうち、東院南面大垣を貫く南北溝SD16040D、東院南門の南西方の東西棟掘立柱建物SB18100の柱穴、東院南門南方の二条条間路北側溝に架かる橋SX18084の柱穴から出土した建築部材について報告する(図273・表40)。いずれもこれまで、その出土位置や法量などを報告するにとどまっていた(『年報2000-Ⅲ』)。以下、遺構ごとに解説を加える。

2 南北溝SD16040D出土部材

出土状況 SD16040は、東院南門SB16000にともなう南北道路の東側溝で、宮内より東院南面大垣を貫き、南端は二条条間北小路北側溝SD5200に接続する。その位置をほぼ変えずに掘り直しがなされ、古い方からA～Dとする。SD16040Dは奈良時代後半の遺構で、幅約70cm、深さ35cm以上である。出土部材は割裂・半裁した丸太材で、木樋の土台として、長手を東西方向に、割肌面を下面向けて据えていた。

部材の形状と痕跡(1～3、図274・275) いずれも全長は600mm前後、幅(径)は250mm前後で、木口面は腐食が激しいが、2・3は末口をヨキで杭状に加工する。末口から約300mmの位置の割肌面に繊維方向に直交して、約50mmの段差をもつ。3は末口から121mmの位置に、長さ78mm、幅62mm、深さ54mmの柄穴をもち、1・2も腐食が激しいものの同様の仕口をもつ。これらから、当該部材は、頭貫および壁小舞の仕口をもつ丸柱の頂部をヨキで切断の上、半裁し、木樋土台として転用したものと考えられる。末口の杭状加工からは、溝の側板などとして転用されたものを、再度礎板に転用した可能性も指摘できる。樹種はいずれもコウヤマキであった(樹種同定は、バリノ・サーヴェイ株式会社高橋敦氏による。以下、同じ)。

3 東西棟建物SB18100出土部材

出土状況 SB18100は東院南門の南西方に位置する、奈良時代後半の桁行7間以上、梁行2間の身舎に南庇が取り付く大型の東西棟掘立柱建物で、南面にはさらに東西4間以上の縁を設ける。身舎には床束を備える。当該部材は、身舎側柱、庇柱、床束、縁束柱の柱穴に礎板として据えられていた。

部材の形状と痕跡 SB18100より出土した礎板は直方材、五平材、板材など、さまざまな形状を呈し、ほぼすべてが転用材とみられる。全長は800～1,200mmのものが多く、木口を杭状に加工するものが多い。またヨキや

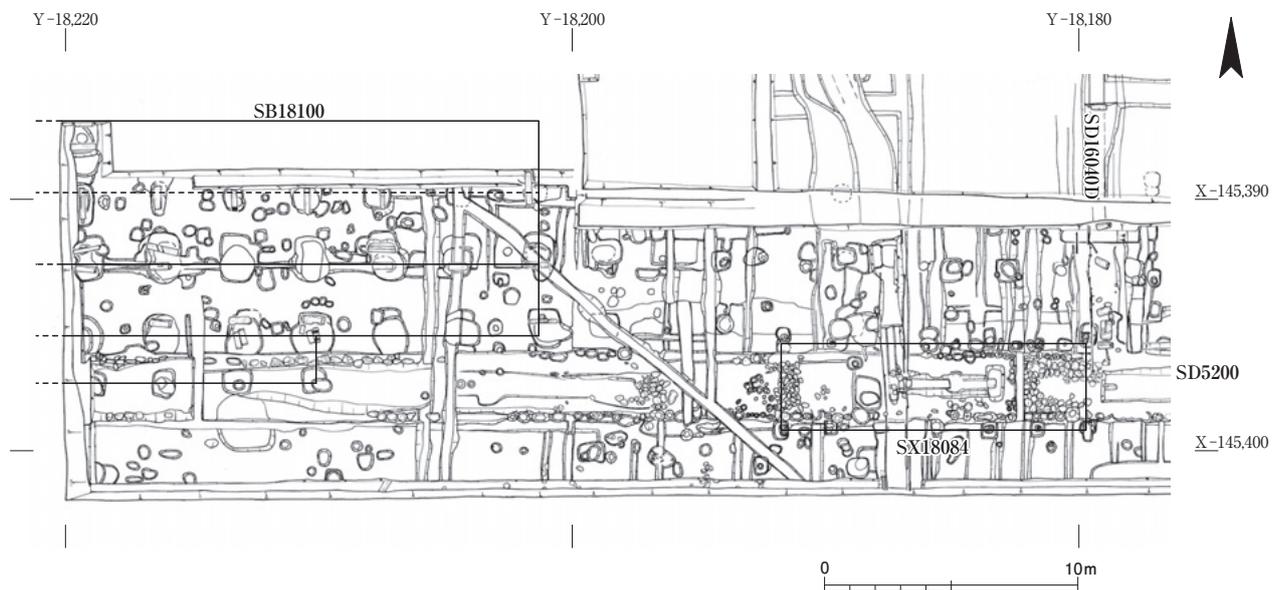


図273 第301次調査区(西半)遺構図(一部) 1:300

表40 第301次調査出土建築部材掲載一覧

番号	遺構番号	出土状況	出土柱穴	法量 (mm)			木取り	樹種 (分類群)	備考		
				長さ	幅	高さ					
1	SD16040D	木樋土台	-	585	253	145	丸太半裁	コウヤマキ	転用材		
2			-	615	248	114	丸太半裁	コウヤマキ	転用材		
3			-	626	247	154	丸太半裁	コウヤマキ	転用材		
4	SB18100	礎板	身舎柱	1,191	195	186	分割角材	ヒノキ	転用材		
5			身舎柱	1,020	244	102	板目	ヒノキ	転用材		
6			身舎柱	1,206	229	109	板目	ヒノキ	転用材		
7			身舎柱	1,018	231	208	芯持角材	ヒノキ	転用材		
8			身舎柱	1,266	151	104	分割角材	ヒノキ	転用材		
9			身舎柱	1,239	233	103	板目	ヒノキ	転用材		
10			庇柱	1,258	194	129	分割材	ヒノキ	転用材		
11			庇柱	920	325	165	半裁状	ヒノキ	転用材		
12			庇柱	452	117	75	板目	ヒノキ	転用材		
13			床束	967	205	117	板目	ヒノキ	転用材		
14			床束	785	242	93	板目	ヒノキ	転用材		
15			床束	870	242	138	板目	ヒノキ	転用材		
16			床束	1,344	210	169	芯持角材	ヒノキ	転用材		
17			床束	1,084	203	143	分割角材	ヒノキ	転用材		
18			縁束	870	240	130	板目	ヒノキ	転用材		
19			SX18084	柱根	橋脚親柱	310	310	540	芯持材	ヒノキ	-
20					橋脚親柱	316	216	582	半裁状	ヒノキ	-
21					橋脚親柱	289	238	446	芯持材	ヒノキ	-
22	橋脚	248			206	324	芯持角材	ヒノキ	-		

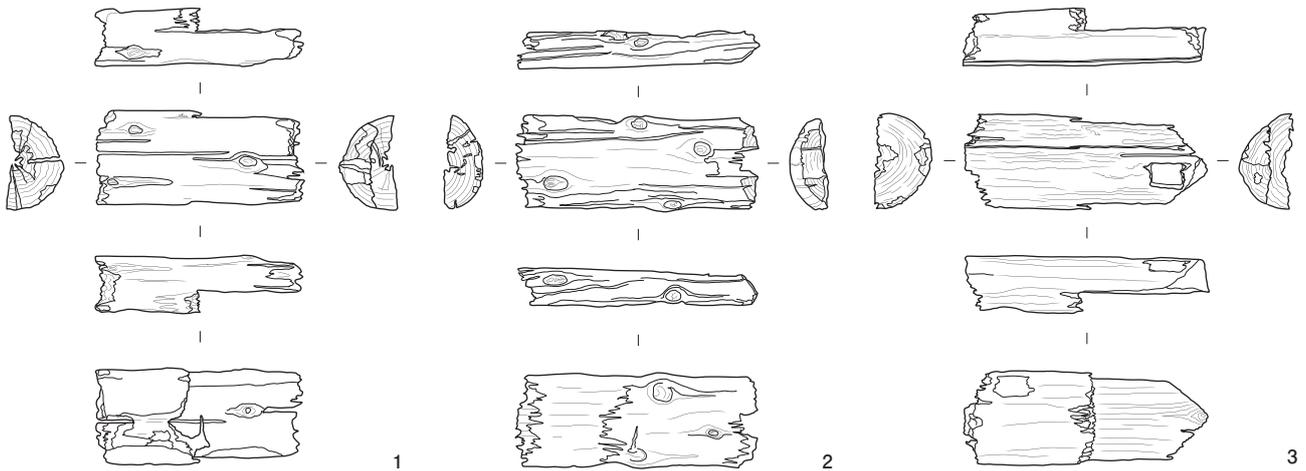


図274 南北溝SD16040D出土木樋土台 1:20



図275 末口(左:1、中:3)と割肌面の段差(右:3)

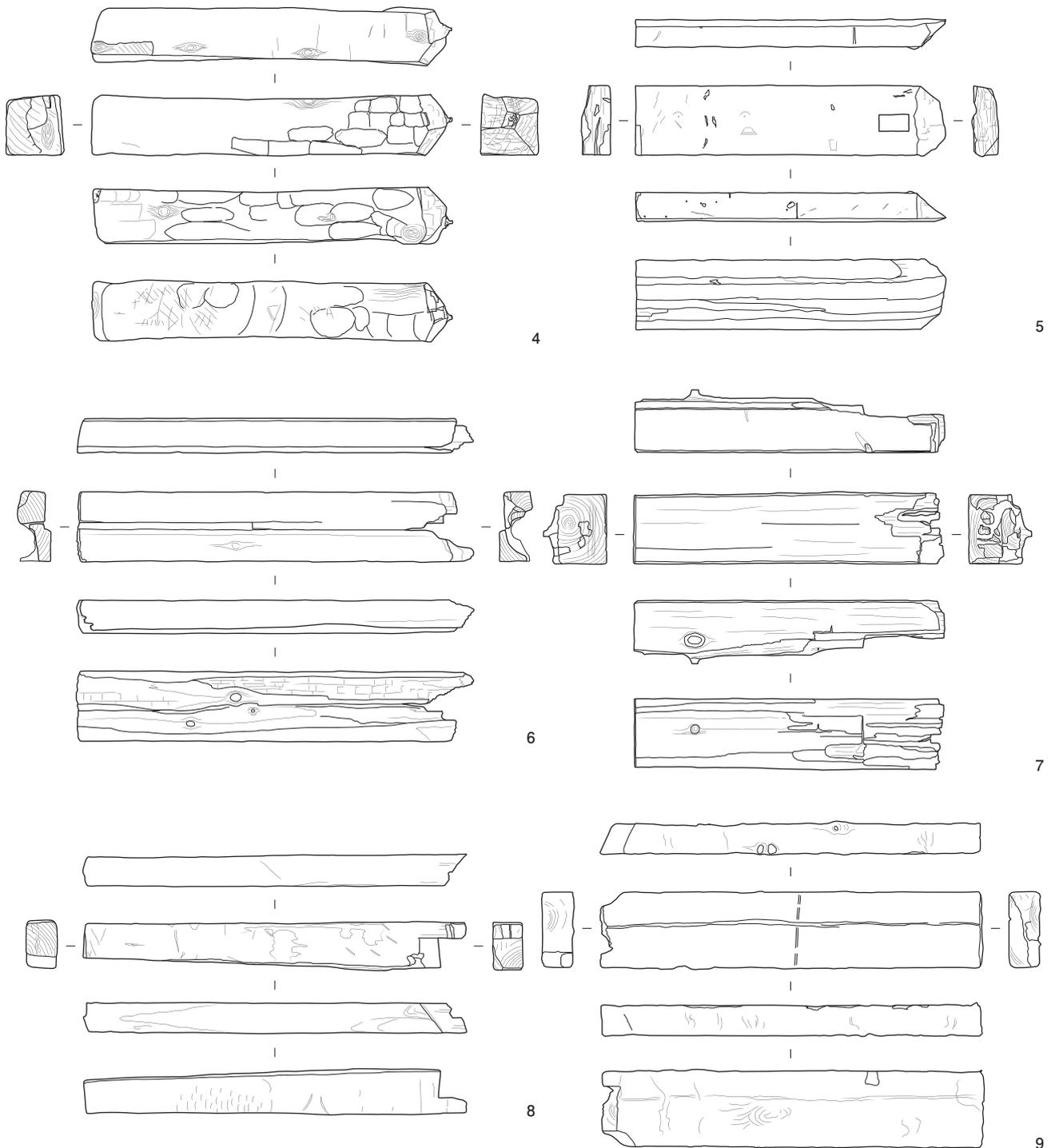


図276 SB18100出土身舎柱礎板 1:20

チョウナ、ノミ、ノコギリなどの加工痕跡が比較的明瞭に確認できた。以下では、出土場所ごとに解説を加える。
身舎柱の礎板（4～9、図276～279） 4は心去の角材で、東端となる元口（図右）をヨキで杭状に切削し、末口はヨキにより垂直に切断する。側面および上下面はチョウ

ナ（刃幅約98mm）で平滑に加工する。柱材を礎板に転用したものであろうか。

5は心去の板目材で、木表を上面として出土した。各側面は割肌で、上面および側面を比較的平滑に仕上げるのに対して、下面の加工は粗く、転用以前の二次加工と



図277 端部の杭状加工とチョウナ痕跡 (4)

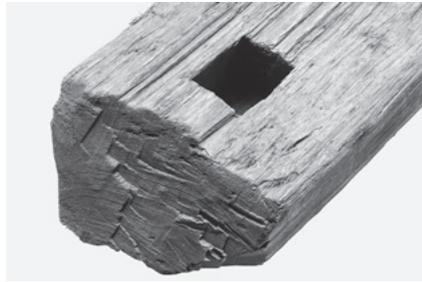
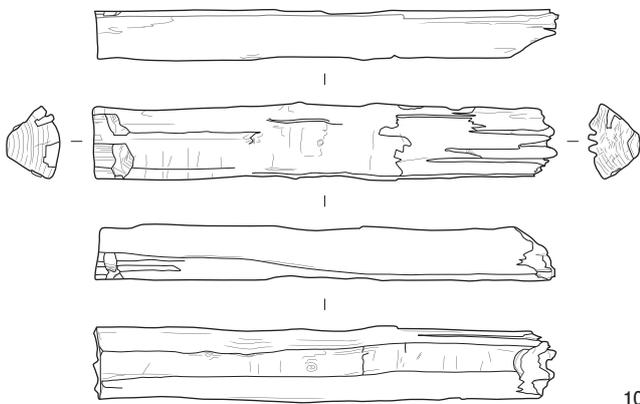


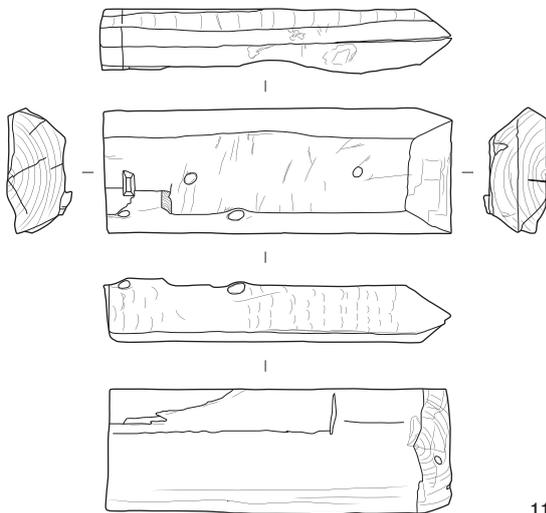
図278 端部の杭状加工と柄穴 (5)



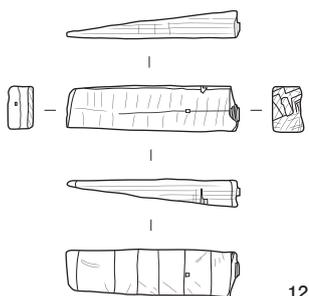
図279 部材中央部の段差 (6)



10



11



12

図280 SB18100出土の庇柱礎板 1:20

考えられる。東端部 (図右) をチョウナ (刃幅約25mm) で杭状に加工しており、木裏の割製材の後に加えたものと判断できる。同端部より145mmのところ、長さ85mm、幅58mm、深さ65mmの柄穴をもつ。もう一方の端部はチョウナにより平滑に調整され、当初の加工と考えられる。以上のことから、転用以前は柄穴をもつ角材で、転用時に木裏面を割製し、先端を杭状に切削、切断し、礎板とした工程が読み取れる。

6は心去のL字型断面をもつ材で、両側面および段差をもつ上面を平滑に仕上げる。下面は腐食が激しく、特に中央部は炭化が進む。西端部 (図左) をチョウナもしくはノミによってほぼ垂直に切断する。加工が粗く二次的なものであろう。もう一方の木口は腐食が激しく、わずかに残るイキ面も、ノミもしくはチョウナによる二次加工とみられる。上面の段差は約30mmで、部材形状から当初は扉材の辺付であった可能性がある。

7は芯持の直方材で、東西両端 (図左右) の木口はノコギリによって切断する。上面、南北両側面を平滑に仕上げ、わずかにチョウナによる凹凸の痕跡が確認できる。末口 (図右) は腐食が激しく、加工痕跡は不明であるが、全長はおおよそ保つものとみられる。下面は末口より266mmのところ、125mmの段差を造る。下面中央部は腐食が激しいものの、両辺部は割肌で、転用時の割裂と考えられる。段差を転用以前の加工とみれば、頭貫を受ける仕口をもった角柱の頂部を割製して切断のうえ、礎板としたものと考えられる。

9は心去の五平材で、北端の末口 (図左) を斜めに切り落とす。加えて西側面に沿って柄穴を造り出し、さらにその下端34mmほどを造出しとするが、用途は不明である。南端の元口 (図右) はヨキによる切断とみられる。下面は全体に腐食が進み、加工痕跡は不明瞭ながらも、平滑に仕上げていることがわかる。下面の西辺には元口

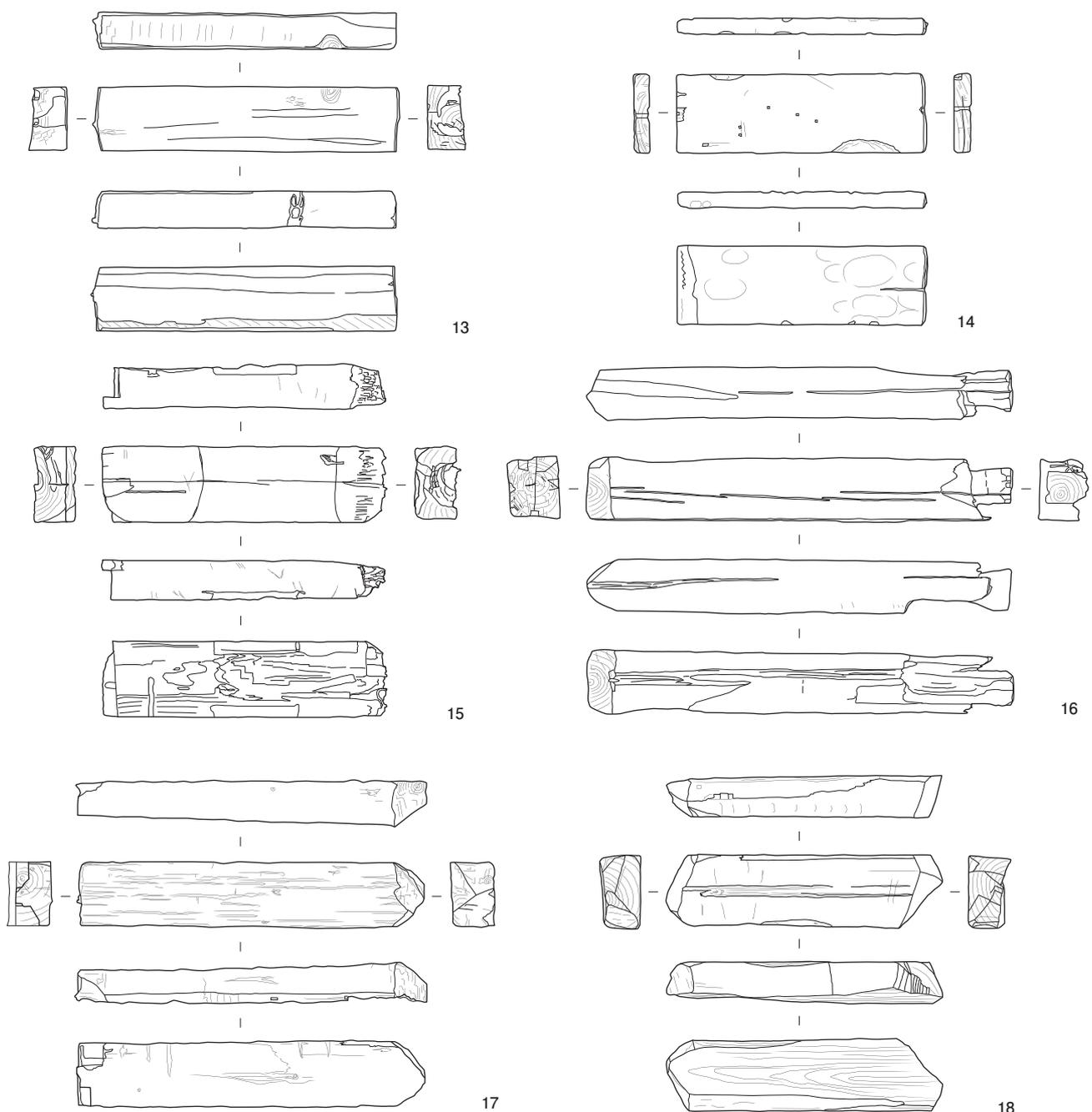


図281 SB18100出土床束礎板 (13~17)・縁台下礎板 (18) 1 : 20

から407mmのところに、楔を打ち込んだような痕跡が確認できる。上面は下面よりも腐食が進み、柱のあたりは不明瞭である。

庇柱の礎板 (10~12、図280・282・283) 12を除いて、全長は身舎柱の礎板とほぼ同等の長さをもつ。

10はミカン割材で、木表を上面として出土し、円弧上をなす上面の中央部をチョウナ(刃幅約35mm)ではつり、平滑とすることで柱据付面を造る。西端部(図左)には一辺約50mmの穴を穿ち、エツリ穴とする。もう一方の端部は腐食が進むが、切断の痕跡はなく、転用以前にすでに切損しており、丸柱を礎板として転用したものと考え

られる。

11は木表を上面として出土し、上面を平滑にして柱を据えたとみられる。西端部(図左)は、圧痕のために加工痕跡が不明瞭ではあるが、ノコギリにより垂直に切断していることがわかる。もう一方の端部は、ヨキにより上下面を杭状に切削する。上面はヨキで平滑にする。上面の西端には長さ65mm、幅28mm、深さ28mmの仕口があり、エツリ穴状ではあるが貫通せず、用途は不明である。下面は割肌で、側面にはチョウナによる加工が明瞭に残る。当初、柱材であったものを、ノコギリで切断した後、チョウナで側面を調整して半裁し、ヨキで上面を平滑に



図282 庇柱礎板 (10) の木口 (左) と柱の据付痕跡 (右)



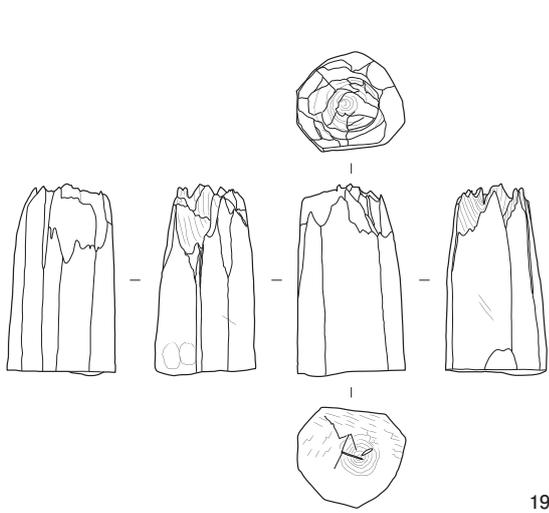
図283 東面木口の加工痕跡 (11)



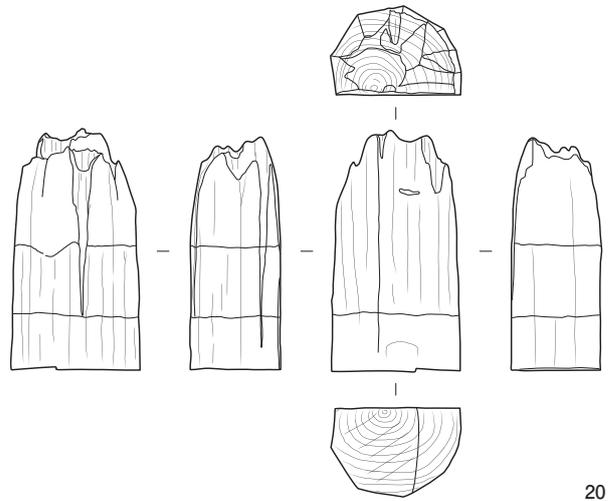
図284 床束礎板 (17) の木口の杭状加工 (左) と柱の落とし込み痕跡 (右)



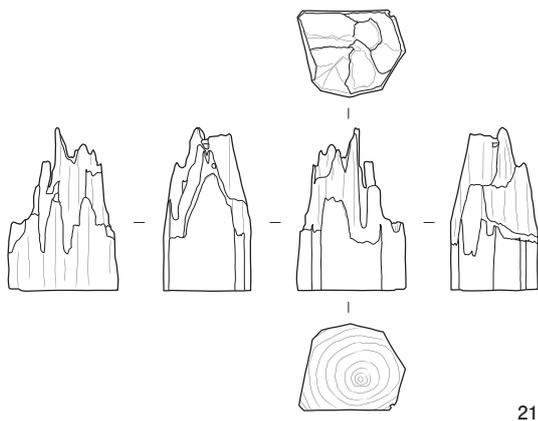
図285 下面木口の切断痕跡 (21)



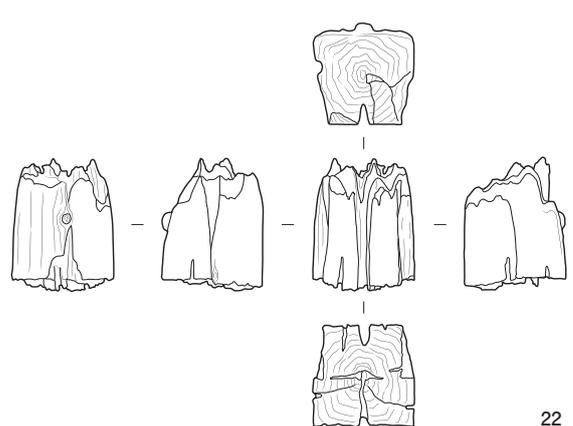
19



20



21



22

図286 SX18084出土親柱 (19~21)・橋脚 (22) の柱根 1 : 20

調整したものと考えられる。

12は楔の形状をもつ。全長は452mmで、他の礎板部材に比べて小さく、当初より礎板と柱の間に楔として用いた可能性もある。尖らせた北端部(図左)から約90mmの上下面に、使用痕跡と考えられる圧痕をもつ。側面および上下面はチョウナ(刃幅約50mm)で平滑に加工する。

床束および縁台下の礎板(13~18、図281・284) 身舎柱の礎板と同様に、端部を杭状に加工するものが多くみられる。これらにはヨキもしくはチョウナによる切断の痕跡が残り、礎板として転用時の二次加工とみられる。

15は心去の直方材である。上面北端(図左)には円弧状に痕跡が残り、柱のあたりと考えられる。下面は激しく腐食し、転用以前は地覆もしくは土台などの地面に接する部材であった可能性が考えられる。

16は芯持の直方材で、北端の元口(図左)をチョウナによって杭状に加工する。転用時の切断にともなう二次加工とみられる。末口(図右)には幅130mm、高さ107mmの出柄を造り出し、ノミによる加工痕跡が確認できる。木口を除く各面の加工痕跡は不明瞭であるものの、平滑に調整される。下面にはわずかにチョウナによる凹凸の痕跡が確認できる。部材形状から、柱の下端を切断して礎板に転用したものと考えられる。

17は芯持の直方材で、割肌面を下面とする。南端部(図右)の木口をノミもしくはチョウナで杭状に切断した後、割裂したと考えられる。西面北端に円弧状の仕口をもち、柱を落とし込むものとみられる。上面は風食が大きく、当初この面が地面もしくは壁地覆にあっていたのであろう。部材形状から当初用途は闕と考えられる。

18は心去の直方材で、上面および両側にチョウナ痕を明瞭に残す。両端部をヨキによって杭状に切断する。柱材を転用したものと考えられる。

SB18100出土部材の樹種はいずれもヒノキであった。

4 橋SX18084出土部材

出土状況 SX18084は、東院南門SB16000Cの南方の二条条間北小路北側溝SD5200Bbに架けられた桁行6間、梁行1間の橋で、奈良時代末期の建物とみられる。柱間寸法は桁行の両端間を6尺、その他を7尺等間、梁行を11尺とし、SB1600Cの中央間3間に橋の桁行長さをそろえる。隅柱は横架材があたる面を平滑にした多角形断面

をもち、そのほかの柱材は角柱とする。前者が親柱、後者が橋脚にあたるものとする。

部材の形状と痕跡(19~22、図285・286) いずれも芯持材で、末口を上方に向けて据えていた。親柱は径300mm前後の丸柱を整えて多角形断面とするのに対し、橋脚は長辺248mmとやや小さい。

親柱(19~21)の上端はいずれも腐食により切損するが、下面はヨキもしくはノコギリによる切断痕跡が明瞭に残り、側面はチョウナによる加工痕がわずかに残る。

橋脚(22)は全体的に腐食が進み、当初の形状が不明確であるが、南側面に幅21mm、深さ61mmの板決り状の溝をもつ。ただし、腐食によるものかもしれない。

SX18084出土部材の樹種はいずれもヒノキであった。

5 礎板部材と建物との関係

礎板の出土状況は既報告(『年報2000-Ⅲ』)でも述べられているが、礎板部材と建物との関係について、ここで再考しておきたい。当地は泥質地であり、建物の自重による沈下を防ぐ目的として礎板が多用されたとみられる。SB18100は大型建物であるため、上部荷重の負荷が大きい身舎側柱と庇柱には複数の礎板を用いたと推察される。身舎側柱では、桁行(東西)方向に複数本の部材によって根固めをおこない、東妻柱の礎板である9のみ梁行(南北)方向に長手を向ける。庇柱の礎板は長手を桁行、短手を梁行に向けて据える。比較的荷重の少ない床束の柱穴では、梁行に長手を向けた礎板1点のみを据える。東妻柱の礎板も含めて、棟通りの礎板は梁行方向に長手を向けたと考えられる。

これらの礎板は柱の抜取時に、位置がずれた可能性があるものの、礎板の向きと建物の軸部構造に一定の規則性がみとれ、奈良時代の建築構法的一端を推察することができる。

6 まとめ

上述の部材からは、奈良時代における礎板を据えた大型建物の建築構法や部材の転用過程、橋脚の構造などを知ることができる。それぞれの遺構ごとに一括性がある点においても、資料性が高いといえよう。

(福嶋啓人・鈴木智大)